

クリスチャン・G・デ・ヴィト「スケールなしの歴史学 ― ミクロ・空間的 視点」

Christian G. De Vito, “History Without Scale: The Micro-Spatial Perspective”, *Past & Present*, 242, Issue Supplement 14, 2019, pp. 348–372.

紹介

ミクロヒストリーとグローバルヒストリーを結びつける方法としてもっとも有力なのがスケールという概念を用いることである。こうした潮流に対して著者は、この概念によってもたらされる問題点を指摘し、スケールに依拠せずにミクロヒストリーとグローバルヒストリーを結びつける方法として「ミクロ・空間的歴史学」を提示する。

1. 「ミクロ」、「空間的」、スケールの問題 (THE ‘MICRO’, THE ‘SPATIAL’ AND THE QUESTION OF SCALE, pp. 348-356)

○スケールによる方法

- ・「スケール」はミクロ/マクロ、ローカル/グローバルといった分断を克服するための基本的な分析の道具となってきた。
- ・「スケールの戯れ」(*jeux d’échelles*)に基づくアプローチが、グローバルな歴史的視点(大きなスケール、接続、構造)とミクロヒストリー的な感度(小さな空間や行為主体性)との統合を具体的に可能にしてくれると考えられている¹。
- ・著者はこうした潮流から距離を取り、ミクロヒストリーとグローバルヒストリーとを結びつける方法として「ミクロ・空間的」視点(‘micro-spatial’ perspective)を提示する。
- ・このミクロ・空間的歴史学は、ミクロヒストリーの認識論的視点とグローバルヒストリーの空間に敏感な方法とを結びつけている。

○ミクロヒストリーとグローバルヒストリーの違い

①ミクロヒストリーとはなにか

三つの異なるレベル(1. 史料によって明らかになる社会的慣行、2. 研究者の仮説と方法、3. 利用可能な学問から引き出される知識)を絶えず相互作用させることにより、カテゴリー、空間的単位、時代区分を引き出す分析的アプローチ。

➡カテゴリー、空間的単位、時代区分があらかじめ決定されているマクロ分析的な歴

¹ Richard Drayton and David Motadel, “Discussion: The Futures of Global History”, *Journal of Global History*, 13-1, 2018.

史学の対極に位置している。

②グローバルヒストリーとはなにか

ヨーロッパ中心主義や方法論的ナショナリズムを問い直し、空間に敏感な方法を強調する考え方。政治的、文化的な境界を超える接続に焦点を当てることを特徴としている。

○ミクロ・空間的歴史学とはなにか

- ・著者が提示する「ミクロ・空間的歴史学」は、ミクロヒストリーとグローバルヒストリーの機能する領域が、上記のようにそれぞれ異なっていることを認識し、分析の「型」（たとえばミクロ/マクロ）と空間的な視野（たとえば、ローカル/グローバル）を混同しない。

➡〔要するに、ミクロ＝ローカル、マクロ＝グローバルというふうに捉えない〕。

- ・ミクロとローカルを排他的に結びつけてしまうタイプのミクロヒストリーの場合、「スケールの縮小」という考え方は、特定の場所を「世界規模の」プロセスが観察される「断片」として理解することを意味している。これは社会科学においてケーススタディがあらかじめ決められた理論の例証として扱われるのと同じである。
- ・このような視点の極端な形は、シグルズル・ギルフィ・マグヌソンによるミクロヒストリーのポストモダンの解釈に見ることができる²。彼はそれぞれの場所の特異性を、交換や接続についてのいかなる歴史的語りの可能性を否定するまでに本質化する。
- ・ほかにもミクロとローカルを結びつける視点は、ジャック・ルヴェルによる「スケールの戯れ」という考え方にも見出すことができる³。
- ・ミクロ・空間的歴史学は、ミクロヒストリーの二つの基本文献（カルロ・ギンズブルグ『チーズとうじ虫』、ジョヴァンニ・レヴィ『無形の遺産』）⁴から、上記のミクロ＝ローカルという視点よりも洗練された概念化を引き出す。
- ・これらの著作において「スケールの縮小」と言われているのは、「顕微鏡」を使うことによって、マクロヒストリーの均質的なカテゴリーの下では見ることはできない、大きな歴史的プロセスの諸側面を観察できるようにすることである。そのため、「ス

² 歴史学文献レビュー⑧を参照。

³ Jacques Revel, “Microanalisi e costruzione sociale”, in Revel (ed.), *Giochi di scala: La microstoria alla prova dell'esperienza*, Roma, 2006. 歴史学文献レビュー⑤も参照。

⁴ Carlo Ginzburg, *The Cheese and the Worms: The Cosmos of a Sixteenth-Century Miller*, Baltimore, 1992 [杉山光信訳『チーズとうじ虫：16世紀の一分挽屋の世界像』みすず書房、2012年]。Giovanni Levi, *Inheriting Power: The Story of an Exorcist*, Chicago, 1988.

ケールの縮小」は研究対象の小ささとも、空間的設定を制限することとも関係がない。

○スケールという考え方の問題点

- ・スケールという概念の使用は不適切である。なぜなら、それは普通の意味においても学問的な使用においても、諸々の歴史的プロセスが社会的なもののある「レベル」に位置しているとか、あるいは異なる観察の「レベル」を採用することで、歴史的プロセスの異なる側面を明らかにできるという考え方をもたらすからである。
- ・多くの歴史家が「マクロ」「グローバル」「ラージ」なスケールについて書くとき、意図しているのは「構造」、「抽象」、「秩序」に焦点を当てたアプローチである。また、「ミクロ」「ローカル」「スモール」なスケールは、「行為主体性」、「具体性」、「複雑性」、「偶然性」に焦点を当てた視点を意味している。
 - ➡マクロ/グローバル/ラージなスケールは、ミクロ/ローカル/スモールなスケールよりも「高位」にあるとふつう考えられている。
- ・このような見方は、知識の可能性をそれぞれの歴史のレベルや観察のレベルに固定化してしまいかねない。
- ・スケールの視点は、克服すべきであったローカル/グローバル、構造/行為主体性という分断をむしろ強化してしまうことにつながる。

2. ローカル/グローバルの分断を越えて：接続された単数（BEYOND THE LOCAL/GLOBAL DIVIDE: CONNECTED SINGULARITIES, pp. 356-359）

○たとえば、奴隷制研究にミクロ・空間的歴史学を適用する場合

- ・ミクロ・空間的歴史学は、歴史的プロセスをローカルやグローバルといったレベルではなく空間的に基礎づける。
 - ➡つまり、グローバルな視点（鳥瞰的な視点）とローカルな視点（細部の分析）といった分断をおこなわない。
- ・ミクロ・空間的歴史学は、奴隷制という概念の裏側に目を向け、人々が奴隷へと変えられていった様々な実践に取り組む。ある地域における様々な個人や集団にとって、奴隷制が何を意味していたのかを問い、奴隷の法的地位や主体的認識が時間の経過に伴ってどのように、またなぜ変化したのかを研究する。
 - ➡ミクロ・空間的歴史学は普遍的な概念を脱構築し、そうした概念の内部に沈滞していた歴史や意味、表象を再構築していく。
- ・「奴隷制」のように世界規模の歴史的プロセスを描いているように見える概念であっても、実際には個別の形態を研究することによって情報が与えられる。
- ・19世紀の大西洋世界における奴隷労働者たちの経験は、（西キューバの砂糖プランテ

ーション、サン・パウロのコーヒープランテーション、ニューオルレ안의家族経営などの場合のように)、それぞれの地域において、またそれぞれの地域の内部においても大きく異なっている。そのため、「奴隷制」という概念は「文脈に固有の社会関係」(context-specific social relationship)としてもっともよく理解することができる。

- ・それと同時に、それぞれの場所の特有性(distinctiveness)はそうした場所が孤立しているから生じたわけではなく、むしろそれらの場所が接続される仕方の特殊性(specificity)から生じている。

○接続された単数(connected singularities)と比較史

- ・ローカル/グローバルという分断を越えて、接続された単数を研究することは、比較を再考することにもつながる。
- ・マクロ分析的な比較はあらかじめ決定された指標に基づいている。そうした指標は内部的に均質で相互に独立していると見なされる空間的な単位を横断して適用される。
→たとえば、近世における大西洋世界の奴隷制を研究する場合、地中海と中央アジアが比較され、奴隷を獲得する仕方、法制度、奴隷解放のパターンが注目される。
- ・それに対してミクロ・空間的視点から見る場合、交流が活発になりそれぞれの地域の境界が透過的になるにつれて、比較される単位間の直接的、間接的な絡み合いを考慮する必要が生じてくる。
→そのため、地中海を横断する様々な地域における奴隷の獲得と解放をめぐる言説や慣行が、アフリカの奴隷制の政治やアメリカの先住民に与えた影響を認識する必要がある。また、中央アジアからの奴隷のフローは、地中海世界における奴隷制の様々な形態を形づくる重要な鍵となっている。
- ・ミクロ・空間的歴史学のこうした方法は、サンジャイ・スブラフマニヤムの「接続された歴史」(connected histories)⁵、サンドラ・クルティウス・コムストックの「組み込み比較」(incorporating comparisons)⁶、アン・ローラ・ストーラーやクレア・アンダーソンの「比較の政治」(politics of comparison)⁷と同じ方向を向いている。

⁵ S. Subrahmanyam, “Beyond Incommensurability: Understanding Inter-Imperial Dynamics”, *Revue d’histoire moderne et contemporaine*, 54-4, Issue 5, 2007, pp. 34–53.

⁶ Sandra Curtis Comstock, “Incorporating Comparisons in the Rift: Making Use of Cross-Place Events and Histories in Moments of World Historical Change”, Anna Amelina et al., (eds.), *Beyond Methodological Nationalism: Research Methodologies for Cross-Border Studies*, New York and London, 2012.

⁷ A. L. Stoler, “Tense and Tender Ties: The Politics of Comparison in North American History and (Post) Colonial Studies”, *Journal of American History*, 88-3, 2001; Clare Anderson, “After Emancipation: Empires and Imperial Formations”, in Catherine Hall, Nicholas Draper and Keith

3. 行為主体性/構造の分断を越えて：社会的実践、権力、スケールの構築 (BEYOND THE AGENCY/STRUCTURE DIVIDE: SOCIAL PRACTICES, POWER AND THE CONSTRUCTION OF SCALES, pp. 359-364)

○行為主体性と構造との関係

- ・ミクロ・空間的歴史学は、ミクロ/ローカルとマクロ/グローバルを混同することから生じる諸問題を回避するだけでなく、行為主体性をミクロのレベルに、構造をマクロのレベルに位置づけるという従来のアプローチを越えることを可能にする。
- ・行為主体性や構造としてふつう言及されているものは、実際には具体的な歴史的行為の中に埋め込まれている。そのため、人間の行為主体性は、自由意志の純粋な表明ではなく、個人の選択、家や集団の戦略、制度的な束縛によって引き裂かれたもの、それゆえ社会関係、権力体制、物質的な限界によって媒介されたものと見なされる。
→つまり、諸個人は完全に自由に行為するわけでもなく、「必然的な」状況の受動的傍観者でもない。
- ・個人や集団の戦略と、構造が課す束縛との間の継続的な絡み合いや衝突によって規則性(regularities)が生み出される（同様に逸脱も）。歴史家はこうした規則性を研究し、経験的なデータを秩序づけ分析するための生成モデルを作ることができる⁸。研究者がこの目的のために、経験的なデータや二次史料、理論的な考察が交差する地点で形成される概念を提示するとき、彼らは史料の中で、史料それ自体に描かれている実践の行為者たちが用いているカテゴリーを利用することもできる。
- ・研究対象の空間的な視野はあらかじめ決定しておくことができない（グローバルとか、ナショナルとか、ローカルとか）。必要なのは、特定のプロセス、フロー、個人、集団、場所を選び出すことである。空間的な広がりとディープな分析との共存が、ミクロ・空間的歴史学を挑戦的だが実行性のあるものにしている。

○ミクロヒストリーの一般化

- ・歴史的プロセスが下から絡み合いつつ構築されることを認識することで、一般化の持続性が与えられる。オズヴァルド・ラッジオとアンジェロ・トッレが観察したように、ミクロヒストリーでは「行動そのものが与える規則」が歴史学の知を一般化する第一

McClelland (eds.), *Emancipation and the Remaking of the British Imperial World*, Manchester, 2014.

⁸ 「生成モデル」という概念については、Fredrik Barth, *Process and Form in Social Life: Selected Essays of Fredrik Barth*, 1, London, Boston and Henley, 1981, esp. chs. 2 and 5.

の道具となる⁹。

- ・一般化のミクロ分析的な手続きは、本質的に方法論的なものであり、内容に基づいたものではない。
- ・一般化可能なものとは、ある場所や時代の歴史的プロセスに関する特定の発見ではなく、むしろ文脈が選択される方法や取り組むべき問題、ある歴史的プロセスの複雑性に関するものである。
- ・このアプローチは大きな歴史の問題に焦点を当てることを可能にする。
- ・「例外的な」文書史料はミクロヒストリーの研究において重要な役割を果たす。なぜなら、そうした文書は歴史の織物の「正規なる」(normal)裂け目や矛盾、断片を強調するからである。この発見的な潜在性はグレンディの矛盾語法である「正規なる例外」(exceptional normal)によって捉えられてきた¹⁰。

4. 時間的スケールを越えて：時間と場所、接続、社会的実践の形成 (BEYOND TEMPORAL SCALES: TIME AND THE MAKING OF PLACES, CONNECTIONS AND SOCIAL PRACTICES pp. 364-369)

○長期の歴史と短期の歴史

- ・構造と行為主体性が異なるレベルに属していると見なされるとき、それらはマクロとミクロのスケールにそれぞれ位置づけられているだけでなく、しばしば特定の時間的スケールにも位置づけられている。
- ➡たとえば、フェルナン・ブローデルの長期、中期、短期の区別。
- ・セバスティアン・コンラートやジョー・グルディ、ディヴィッド・アーミテージは長期の歴史と短期の歴史を区別し、前者を後者よりも優先する¹¹。そのため、長期の歴史の解釈を打ち立てるのはビッグデータに基づくマクロな分析であるとされ、ミクロヒストリーは限定的な役割しか与えられない。

○時間性の結合

- ・こうした解釈に対して著者は、ミクロヒストリーが共時的な語りに限定されておらず、ミクロ・空間的視点は短期と長期という分析の区分そのものを問い直し、複数の

⁹ Osvaldo Raggio and Angelo Torre, “Prefazione”, in Edoardo Grendi, *In altri termini: Etnografia e storia di una società di antico regime*, Milano, 2004, p. 33.

¹⁰ 「正規なる例外」については歴史学文献レビュー⑦を参照。

¹¹ Sebastian Conrad, *What is Global History?*, Princeton, 2016 [小田原琳訳『グローバル・ヒストリー：批判的歴史叙述のために』岩波書店、2021年]。Jo Guldi and David Armitage, *The History Manifesto*, Cambridge, 2014 [平田雅博・細川道久訳『これが歴史だ!: 21世紀の歴史学宣言』刀水書房、2017年]。

結合された時間性が連結するパターンを明らかにすると主張する。

- ・ミクロ・空間的視点は、数世紀を対象とする研究と、複雑性や不連続性、不均一性を強調するミクロ分析の認識論を組み合わせる可能性を秘めている。ある場所の特有性が空間を越えた同時接続によって生じるように、特有性は過去の接続の複数性によっても形づくられている。それにより、共時的な分析と通時的な分析の従来の断絶は克服することができる。
- ・人類学者ロレンツォ・ダンジェロは、シエラレオネの鉱山労働者の研究において、異なる時期や場所で生じる様々な労働経験や労働慣習の絡み合いの問題に取り組んだ¹²。彼が理解しなければならないと論じたのは、この絡み合いそのものがどのように「昔の」労働関係に新しい意味と役割をもたらし、共時的、空間的な形態と相互作用しているのかであった。
- ・こうした視点を概念化する上で役立ったのが「ウィトゲンシュタインの糸」という比喩である。これは可変的な長さの繊維で編まれた糸であり、それぞれの繊維は複数の現象に関連する様々な年代を表わし、繊維が束ねられることで特定の歴史的文脈を構成する。この糸は現代の出来事の長さで切ることができるだけでなく、他の長さでも切ることができるので、歴史家は過去の文脈の内部においても時間と空間を超える接続に取り組むことができる。
- ・異なる社会は異なるペースで異なる方向に動き、時間と歴史を多様な仕方で、ときにはそれらが衝突するような仕方で概念化している。
- ・ミクロ分析的な研究は、異なる社会的行為者や実践、場所に関して複数の時間性が存在することを明らかにする。時間は異なる仕方で経験される（たとえば、エリートと従属諸階級、男と女、子供と大人、特異な民族的、宗教的、文化的背景を有する個人や集団）。諸個人や諸集団は、複数の地域に散らばっているだけでなく、異なる過去や記憶、期待を有しているのである。
- ・ミクロ・空間的視点は、歴史的発展が直線的でも予測可能でもないと考える。複数の、あるいは接続された近代性が存在すると考えて、近代性を西洋の基準と同一視しただけでは十分ではない。そもそも近代性ということについて考えず、時代区分を再考することが必要である。
- ・従来の時代区分（「近代以前」「近代」「有史以前」「古代」「中世」「近世」）は、ミクロ・空間的歴史学が克服しようとするヨーロッパ中心主義の遺物である。

¹² Lorenzo D'Angelo, "From Traces to Carpets: Unravelling Labour Practices in the Mines of Sierra Leone", in De Vito and Gerritsen (eds.), *Micro-Spatial Histories of Global Labour*, London, 2018.

- ・あらかじめ定められた時代区分を越えて、研究の過程で構築されるアド・ホックな時代区分へと進まなければならない。そのとき初めて、時間と空間を越えた歴史の連続と不連続に十分な注意を払い、社会集団や場所、トピックに応じた複数の時間性が同時に存在することを認識することができる。

5. スケールについて考えるのをやめる、ミクロ・空間的歴史学の政治 (UN-THINKING SCALE AND THE POLITICS OF MICRO-SPATIAL HISTORY, pp. 369-372)

○歴史学の役割

- ・ミクロ・空間的歴史学は、ミクロヒストリーやグローバルヒストリーとともに、歴史学と社会の関係性についての幅広いビジョンを共有している。このことは、歴史学の知の「流布」を「政策立案者」の小さな世界に結びつけ、「利用できる過去」を現代の「世論」や政策立案者に影響を及ぼす「ビッグデータ」の産出と同一視する傾向とは著しく対照的である¹³。
- ・今日の議論に直接結びつくトピックに取り組む以外にも、歴史研究はその方法論を通して力を発揮することができる。ミクロ・空間的視点は、スケールを分析のカテゴリーとして考えずに社会的な構築物として見なすことにより、スケールに限定された言説と現代の政治や日常生活に支配的となってしまった慣行を問い直す道具を与えてくれる。
- ・このように考えると、たとえばグローバリゼーションは、世界全体を同時に取り込む一様でユビキタスなプロセスなのではなく、むしろヘゲモニーによる社会的、言説的実践の矛盾する一連の束である。グローバリゼーションは複数形(Globalizations)であり、様々な場所に位置し相互に対立するエリートによって推進された上からの計画や過程を含むとともに、下から生じる複数の「反グローバルネットワーク」をも包含している。
- ・スケールについて考えるのをやめて、それが構築されたものであると指摘することは、次のような解放的效果を有している。
 - ①あらかじめ決められた、均質で疑いの余地のない存在を提示するのではなく、制限されていない、互いに衝突するような社会的プロセスを見ることを可能にする。
 - ②歴史家の仕事を、互いに競い合うヒエラルキー的な試みとしてではなく、共同の超地域的な試みとして認識することを可能にする。

¹³ 著者はこうした視野の狭い見方が、ジョー・グルディとディヴィッド・アーミテイジによる歴史学のマニフェストにさえ反響していると指摘する〔平田雅博・細川道久訳『これが歴史だ!: 21世紀の歴史学宣言』刀水書房、2017年〕。

- ③文脈に敏感な研究というのは、歴史研究がそれぞれのローカルコミュニティとその記憶や自己表象の構築に与える影響に自覚的であることを要求する。このことは学問分野が学問の世界の外の制度や集団と今まで以上に協同することを促す。